

Frank J. Webbの奇妙な経歴

*The Garies and Their Friends*に見る19世紀半ばの「文学」と「人種」

森本 奈理

I. はじめに

アメリカ文学は、19世紀半ばのAmerican Renaissanceと分類されてきた時代に、独自の形を追求しはじめるが、この、新たな希望に満ちていたはずの「フロンティア」において、Nathaniel Hawthorne, Herman Melvilleのように、アメリカの「光」の部分ではなく、「闇」に強く惹きつけられた作家がすでにいたことは大変に興味深い。Hawthorne, Melvilleとも、言わずと知れた大作家であり、彼らの「闇」に関して様々な解釈が提示されてきたが、私が注目したいのは、人種にまつわるアメリカの「闇」である。「自由」を建前にする「共和国」アメリカにおいて、アフリカ系アメリカ人（黒人）のように、同じ人間でありながら自由を享受できない存在がいたことは、他の社会問題以上にHawthorne, Melvilleを悩ませたことだろう。彼らと時を同じくして、建国以来200年以上に渡って、劣位を強いられてきた黒人が小説を発表し、自らの存在を誇示しようとはかったことは偶然の一致とは考えられない。アメリカ南部で、奴隷制はいまだ命脈を保っていたのみならず、いち早く奴隷制を脱した北部で、「白人」「黒人」を隔てるcolor lineが形成されつつあった事実は、この時代の「文学」に濃い影を落としていたと判断するほうが自然だと私には思われる。ここでは、19世紀半ばに書かれたテクストのなかから、Frank Webbの*The Garies and Their Friends* (1857)を取りあげて、彼の人種問題へのアプローチの「可能性」と「限界」について考察してみたい。

この時代の黒人文学に共通するテーマは、当然のことながら、「(差別の対象である)黒人がアメリカ人になることの難しさ」をめぐるものである。Webbに先行して作品を発表したWilliam Wells Brownしかり、後に続いたMartin Delany, Harriet Jacobs, Harriet Wilsonしかり、である。Brownの*Clotel; or, The President's Daughter* (1853)の結論は、自由を求めた主人公がPotomac河に身を投げて自殺するように、アメリカ国内では黒人は自由になれない、というものであるし、Delanyの*Blake; or, The Huts of America* (1861-62)の結論は、奴隷解放のために南部で反乱

を起こそうとして結局はあきらめた主人公がキューバにて黒人帝国を建設する、というものである。¹⁾ Jacobs, Wilsonの小説の主人公は、とりあえずの難は逃れるものの、将来の見通しは暗いまま小説は終わっている。

こうした作家たちのなかにあって、ここで私が扱うWebbはやや異質である。簡潔に言ってしまうと、明らかに黒人受難の状況にあったにもかかわらず、Webbは物語を「ハッピーエンド」で閉じている、ということである。*The Garies*のプロットの要は、「黒人の魂は向上しうるか」ということであり、その意味では、約半世紀後の南部で解放奴隷の社会的地位向上のために奮闘した活動家Booker T. Washingtonと同じように、目の前にある白人の不正を見て見ぬふりをする妥協的態度を取っているとと言えるだろう。²⁾ Webbの態度に見られるこうした「あいまいさ」こそ、私が*The Garies*に惹かれている最大の理由であり、このジレンマを克服しようという欲求から、Harlem Renaissanceのような黒人「文学」の豊饒期がやって来たのだと私は強く信じている。³⁾ すなわち、この類いの「あいまいさ」を克服するプロセスを経て、黒人文学が「文学」たりえるようになったのだ、ということである。

II. 中産階級のエートスの「光」と「闇」

*The Garies*は人口に膾炙したテキストではないので、小説の粗筋を簡単にまとめておこう。*The Garies*は、白人のGarie家の没落と黒人のEllis家の発展を扱っている。Mr. Garieは南部上流階級に属する白人男性だが、妻Mrs. Garieは混血である。夫妻には息子Clarence、娘Emilyという2人の子供がいる。一家はGeorgiaの大農園に暮していたが、「南部の法制下では自分と子供は奴隷であり、Mr. Garieにもしものことがあれば、自分たちは奴隷として売り飛ばされてしまうだろう」というMrs. Garieの不安を解消するために、奴隷制のない北部Philadelphiaへの移住を決意する。そして、そこで下層白人を主体とする人種暴動に巻き込まれ、夫妻はあえなく死んでしまう。残された子供は人種的に別々の人生を歩むことになる。Clarenceは白人としてpassingすることを選び、Emilyは黒人としてPhiladelphiaの黒人地区で暮らすことを選ぶ。Clarenceは、恋人との結婚目前にして、彼の出自が暴露されてしまい、恋人を失った絶望から衰弱死してしまう。この「悲劇的な混血」プロットと同時に、Charlie Ellisと彼の肉親・友人が逆境に負けず社会的に成功する物語が進行する。Charlieはいたずら好きではあるが、頭がよく礼儀正しい黒人少年で、卑しい奴隷根性もなく独立心旺盛である。人種暴動の暴徒によって指を切り落とされ廃人

同様になってしまった父Mr. Ellisに代わって、家族を支えようと働きに出る。就職差別を経験しながらも、持前の器用さで絵付け職人として成功し、Emilyと結婚するくぐりて物語は幕を閉じる。

この小説でWebbが主張しようとしているのは、「確かに差別による困難はつきまとうが、黒人もアメリカにて共和国の成員たりえる」ということである。この主張は、「黒人は人間であるというよりもむしろ動物である」という白人の先入観に反駁をするもので、ありていに言うと、近代国家において顕著に見受けられる「中産階級のエートス」を黒人も身につけられる、というものである。

この「中産階級のエートス」なるものを簡単に定義しておく、これは、ブルジョアの支配する近代市民社会において、「従順さ」の証しである「勤勉」のことを意味している。Max Weber流に言えば、「勤勉」とはプロテスタンティズムの「禁欲」「節制」のことなのだが、ここでは、この精神をもっと広義に解釈して、近代に特有の「(システムによって) 矯正された内面」までをも意味していると捉えることにしたい。Michel Foucaultによれば、近代「権力」のターゲットは、人間の「身体」ではなく「精神」である。学校・工場・監獄などの組織は、人間の内面に働きかけることによって、ブルジョア市民社会の健全分子としての「従順な身体」を作り出しているのである。例えば、「時計のように正確な人物」というのは、このシステムの必然的産物である。監獄に顕著に見られるように、罪の程度は「刑期」という数量に変換され、日課も厳密な時間割によって区分されているのである。⁴⁾

ここで注意しなくてはならないのは、このエートスは、むしろ「反アメリカ」的であったということである。そもそも、アメリカ建国期の理想は、こうしたエートスの「鬼子」とでも言うべきヨーロッパ都市文明の「害悪」からの自由、個人がそれぞれ「独立自営農民」として自主自立の生活を営む必要性をうたいあげていたのである。もちろん、こうした理想は理想にすぎないのであったが、それでもアメリカ人の「自由」観に絶えず影響を与えてきたので、産業都市文明化が進展していた19世紀半ばのアメリカ北部において、独特の「エートス」を作り上げるのに貢献してきたのである。すなわち、農村ではなく都市で暮らしつつも、「主人 (master)」「雇い主」に従属した「召使い (servant)」になるのではなく、あくまで、独立した「職人 (mechanic)」でありたい、という心性をそこに付け加えたのである。当時のアメリカ人にとって、「召使い」は「奴隷 (slave)」と同義であり、そのようなレッテルを貼られることは恥辱以上の何物でもなかったのである。⁵⁾

*The Garies*において、こうした「独立心」を最もよく表しているのが黒人少年の

Charlieである。Charlieは学校に通っており、この息子に大きな期待をかけている父Mr. Ellisは、ゆくゆくは(ラテン語を教える)上級学校に進学させるつもりである。Mrs. Ellisは、このことをかつての奉公先であるMrs. Thomasに打ち明けると、白人である彼女は、黒人が学問を身につけても、学歴にふさわしい職業に就くことはできないので、そのような計画をさっさと諦めさせようと、学校休暇中だけでもCharlieに彼女のもとで召使いとして経験を積ませるように夫妻を説得する。当初Charlieは、あるパーティーにて座の話題となっていた文章の典拠をあざやかに示して賞賛を得るといったように、召使いとしてかなりうまく立ちまわるのだが、悪友のKinchと再会して以降は、彼の入れ知恵で様々ないたづらをするようになり、ついには、Mrs. Thomasによって、「素行不良」の烙印を押されて、自宅に送り返されてしまう。Ellis夫妻は息子の変わりように驚いてしまうが、Charlieはそのことを以下のように弁明する。働くのは嫌じゃないけれども、召使いとして誰かに使えるのは嫌だ。父のように、独立自営の職人として働きたい：“I don’t mind work—I want to do something to assist father and mother; but I don’t want to be any one’s servant. I wish I was big enough to work at the shop” (32)。職人は自由民の中で最下層に位置し、黒人が就くことを許されたほぼ唯一の職業なのであるが、それでも、「奴隷」に等しい召使いとの間には雲泥の差があったのである。

Charlieの独立心を裏づけるように、Mr. Ellisの友人で(不動産業で財産を築いた)大金持ちの黒人Waltersは、お気に入りのCharlieが召使いとして奉公に出されたことに憤慨する：“How would you like him [Charlie] to be a subservient old numskull [...]?” (62)。Waltersによれば、あまり早くに「使い」を経験させると長じて「卑屈」になる、もしも金に困っているなら白人少年のように新聞売りでもさせろ、そうすれば商売に必要な知識が自然と身につく、ということである：“[...] why don’t you do *as white women and men do*? Do you ever find them sending their boys out as servants? No; they rather give them a stock of matches, blacking, newspapers, or apples, and start them out to sell them” (emphasis added 62-63)。

Charlieもこのような価値観をすでに内面化させているので、随所に「召使い」に対する軽蔑が現れる。このあと姉Caddyとの諍いで腕を骨折したCharlieは、篤志家Mrs. Birdの援助を受けて、Warmouthで転地療養をするのだが、食事の際、給仕女からMrs. Birdお抱えの召使いが食べ終わるまで待つように指図される。(保護者Mrs. Birdは急用でWarmouthに到着と同時に彼女の自宅を留守にしている。) そのとき、Charlieは「召使いですら僕と一緒に食べてくれないんだ：“Even the servants

refuse to eat with me because I am coloured”とショックを受ける (143)。また、Charlieは、召使いの長靴を洗うように指図され、それを引き受けるが、洗っている長靴が「召使い」のものであることが気に入らない：“I’ll do my best,” said Charlie, who, although he did not dislike work, could not relish the idea of cleaning the servants’ boots” (144)。

Warmouth滞在中に自分には絵の才能があることを知ったCharlieは、人種暴動の際に指を切り落とされ廃人になってしまった父Mr. Ellisに代わって、一家の大黒柱になろうとPhiladelphiaで職探しを始める。「肌の色」を理由に2度就職差別を経験するものの、最終的には、紙幣の絵付け職人として働くようになる。しかし、Horatio Alger流のCharlieの立身出世物語が詳細に語られるのはここまでで、このあと「職業人」として世間を渡り歩くCharlieについては、一切記述がなされない。彼について読者が知るの、彼がEmily (Garie)と結婚し、2年間ヨーロッパ滞在をするといったことだけである。この言及でもって物語は幕を閉じているので、これ以上のことは何も分からないのだが、私が気になるのは、Charlieがこのヨーロッパ滞在費をどこから工面したのか、ということである。このときまでにCharlieが絵付け職人として独立を果たしていたとしても、2年間のヨーロッパ滞在費を賄えるまでに利益をあげているとは考えにくいし、誇り高く他人の情けにすがることを嫌うEllis家の長男なので、(姉Estherと結婚をして今や親戚となった) Waltersから資金援助を受けているとも考えにくい。この謎を解く最大の鍵は混血女性Emilyとの「結婚」であり、彼女は、後述する理由により、遅ればせながら(Charlieとの結婚直後に)、Garie家の莫大な遺産を相続している。おそらく、これこそがヨーロッパ滞在費の出所なのであろう。

白人上流階級の血を引く混血との結婚により遺産を相続しアメリカで幸せに暮らした、という物語の展開は、*The Garies*のような「黒人が向上し、白人との融和をはかる」小説の常套手段と言ってい。南北戦争中の奴隷解放と再建時代の「黒人」優遇政策が終了すると、南部諸州は反動的なアパルトヘイト政策をとり、それにしたがってcolor lineが形成されたのだが、*The Garies*よりも半世紀ほど後のこの時代に、こうしたプロット展開を見せる小説が頻繁に出版されたのである。典型的な小説を1つ挙げておくと、Pauline Hopkinsの*Contending Forces: A Romance Illustrative of Negro Life North and South* (1900)では、主人公の女性が教養ある黒人男性と結婚をするのだが、彼はイギリス貴族の血を引いており、そこから相続した遺産を持つ金持ちなのである。(彼はHarvardを卒業してドイツに留学しており、

大変に雄弁な人権活動家なのだが、遺産相続まではホテルの給仕にすぎず、金銭を稼ぐ能力に関しては、並のレベルだと考えられる。)

WebbやHopkinsのこうした戦略に、彼らの本音が透けて見えるように私は思う。それぞれの時代にあって、黒人が、実際には存在した職業差別をものともせず、社会的に上昇を極める姿を描くことは、あまりにもリアリティーを欠いている。そうだからといって、黒人の職業活動をありのままに書いてしまえば、社会のメインストリームを構成している「白人」からの賞賛を得られる、「みすぼらしくない生活」には到底なり得ない。このジレンマを解決するために彼らが活用したのが、「悲劇的な混血」の「一時相続を保留された財産」である。センチメンタルな「悲劇的な混血」プロットは、奴隷制度廃止運動の歴史とともに古いものだが、このプロットを自らの目的に沿う形で、WebbやHopkinsは焼き直しているのである。⁶⁾ ここで私が言いたいのは、Webbは、主人公Charlieの就職後の生活を書かないのではなくて、書けないのだということである。

したがって、物語の焦点は、「家の外でいかにパンを買う金を稼いでくるのか」という問題によりも、「家の中がいかにきちんと秩序づけられているのか」という問題にもっと強く定められる。すなわち、*The Garies*が書かれた時代にあっては、アメリカにおいても未だ女性解放は達成されておらず、「家の外 (abroad)」は男性の領域、「家の内 (at home)」は女性の領域であったのだが、Webbの主なターゲットは、後者のdomesticな領域である、ということである。⁷⁾ このことは、人種暴動によってMr. Ellisが廃人になってしまい、息子のCharlieが世の中に出るようになる物語の後半にいっそう顕著であり、それまで一家の大黒柱であったMr. Ellisが存在感ゼロ状態に追いやられるのに対し、Mrs. Ellisは子供たちに大きな影響を与え続ける。そもそも、物語の終わりで、Charlieの結婚とClarenceの婚約破棄による衰弱死が対比されていることからして、*The Garies*は「結婚(の成否)」をプロットの中心に据える、「女性的」なテキストであると言えなくもない。

ここからは、「家庭内の領域」をWebbがいかに描写しているのかを見ていきたいが、完全に「家の外」から「家の内」に移る前に、この2つの領域をまさに隔てる境界線とでも言うべき「家」について簡単に触れておきたい。物語の冒頭で、Mr. Ellisのもとに旧知の間柄であるGeorge Winstonが訪ねてくるが、「この家は借家か」という彼の質問に対し、Mr. Ellisは胸を張って「自分の持家だ」と答えている：“‘It’s mine!’ replied Ellis, with an air of satisfaction; ‘house, ground, and all, bought and paid for since I settled here’” (49)。先述したように、あくまでも「個人の自由」

を最重要視するアメリカにあつては、マイホームを所有することこそ、共和国の成員として「一人前」の証しなのである。⁸⁾ また、金持ちの黒人Waltersは不動産業を営んでおり、Philadelphia市内に多数の賃貸物件を所有しており、白人で悪党のMr. Stevensも彼から住宅を借りているために、黒人といえども表立って彼に楯突くことができないでいる。さらに、Waltersは、あるホテルで肌の色を理由に食事の提供を拒否される屈辱を味わうが、その仕返しにホテルをまるまる購入し、失礼な支配人をクビにするのである。

Samuel Otterが指摘する通り、*The Garies*における「屋内」描写については、「(物質的富を精緻に描いた) 静物画 (still life)」的だという形容が正しいであろう。⁹⁾ そもそも、その起源からして、静物画は、近代以降のブルジョア階級勃興とともに、彼らの物質的繁栄を指し示すものとして機能してきたのだから、これはここまで説明してきた「作者Webbの意図」にそのまま合致する。*The Garies*全体の基調が静物画的である以上、そこに登場する黒人も、「行動の主体」であるというよりは、「(我々が見る) 対象」であるといった雰囲気であり、良く言えば、彼らは静謐さをたたえた上品な人物なのであるが、悪く言えば、あまりにも退屈なflat characterにすぎないのである。ただし、小説には、Ellis家の次女Caddyのような例外も描かれており、彼女は「きれい好き」の極致であり、「整理整頓」術の天才である。彼女は室内に「ちり」「ごみ」ひとつすら落ちていることを許さない、中産階級的な美德を極限にまで推し進めている人物であり、あたかも「ほうき」と一体化してしまっているようにも見える。¹⁰⁾ 困ったことに、Caddyの「ほうき」は「武器」にもなり得るのであり、彼女は、玄関に落書きにやって来たルンペン黒人少年を「ほうき」でぶちのめそうとしたり、怒りに駆られて、弟Charlieを階段から突き落とし骨折させてしまったりする。

こうした、「中産階級のエートス」が持つ、「闇」の部分としての「攻撃性」を、作者Webbは、完全にではないが、うすうすとは気づいていたと私は信じている。¹¹⁾ 自分の家が下層白人による人種暴動のターゲットになっていることを知ったWaltersは、暴徒に立ち向かうために仲間の黒人を呼び集め、自宅を要塞化するが、このエピソードでは、「秩序」を重んじる整理整頓の才が、組織化された「暴力」に早変わりする。

Yells of rage and agony ascended from the throng, who, not seeing any previous signs of life in the house, had no anticipation of so prompt and severe a response to their

attack. For a time they swayed to and fro, bewildered by the intense light and crushing shower of stones that had so suddenly fallen upon them. (212)

上の引用は、Walters軍によって奇襲攻撃を受けた白人暴徒の側の反応を記述したものであるが、Walters軍の隊員はそれぞれの持ち場に就いて弾丸や石つぶてをお見舞いしているのに対し、白人暴徒はただの「寄せ集め」軍である。銃火器を使用する近代戦争において、古代ギリシアの「密集隊形（ファランクス）」では、あっという間に全滅の危険性があるのだが、白人暴徒は、このファランクス以下の「烏合の衆」である。もちろん、ここには、「近代」戦術をとる黒人と「近代」化されない野蛮な白人の対比があることは言うまでもない。

一連の戦闘において、最も印象深い活躍をするのがCaddyである。彼女は、「熱湯」と「唐辛子」を持って建物の最上階に立てこもるのだが、そこでそれらを混ぜ合わせ、Waltersの家に侵入しようとする暴徒に頭上から「唐辛子液」を浴びせかけて、彼らを撃退するのである。彼女にかかれば、「ほうき」「熱湯」「唐辛子」といった極めて「家庭的な」物品でさえ、一見では想像もつかないほどの破壊力を持った「兵器」にされてしまうのである。

ただし、中産階級的な「家事切り盛り」の才が、「暴力」と隣り合わせであるという矛盾は、人種暴動よりもかなり先だって暗示されている。Philadelphia移住の際に世話になった返礼に、Mr. GarieがWaltersの自宅を訪ねるエピソードで、彼とともに我々読者も、邸宅の室内装飾にやや異質な要素がまぎれこんでいることを知るのである。

The elegance of the room took Mr. Garie completely by surprise, as its furniture indicated not only great wealth, but cultivated taste and refined habits. The richly-papered walls were adorned by paintings from the hands of well-known foreign and native artists. Rich vases and well-executed bronzes were placed in the most favourable situations in the apartment; the elegantly-carved walnut table was covered with those charming little bijoux which the French only are capable of conceiving, and which are only at the command of such purchasers as are possessed of more money than they otherwise can conveniently spend.

Mr. Garie threw himself into a luxuriously-cushioned chair, and *was soon so absorbed in contemplating the likeness of a negro officer which hung opposite* [. . .].

(emphasis added 121)

例のごとく、Webbは、静物画的に室内装飾をリアリスティックに描写し、黒人にも白人と同じような「趣味の良さ」が備わっていることを示しているが、Mr. Garieは、しつらえの立派さに感心すると同時に、黒人将校の肖像画に見入ってしまう。この肖像画に描かれている人物は、Toussaint Louvertureなのであるが、Mr. Garieがこの肖像画に見入ってしまうのは、彼がToussaintに興味があるからではなく、威厳のある姿で描かれた黒人の肖像画をそれまでに見たことがなかった「もの珍しさ」からである。Waltersによると、このように威厳のあるToussaint像は珍しく、Toussaint像のステレオタイプとしては、彼をサルのように書くのが普通であった。おそらく、白人の見地からすれば、有能な指導者としてハイチ独立運動で活躍したToussaintを（minstrelsy的に）戯画化することによって、脅威の存在を骨抜きにしようとしたのであろうが、Waltersの所有するToussaint像は、それが立派であるだけにいっそう、（中産階級的な）「品の良さ」と同時に、それに潜在する「攻撃性」をより強く示していたものと思われる。ただし、Webbの目的は、「白人」「黒人」両人種の融和をはかることなので、小説における黒人の行動原則は、「やられたらやり返す」といったものであり、権利拡張を目指して、主体的に「暴力」を使用するほど攻撃的ではないことを、一言言っておかなければいけないであろう。

Ⅲ. 人種暴動, passingの不可能性

ここまでは、社会のメインストリームを構成する白人に「同化」するために、内面の陶冶に励む黒人（と、その隠された「攻撃性」）を見てきたが、ここからは、そうした黒人に対する白人の反応を見てみよう。小説には「鉄道」「食卓」「学校」「教会」での座席分離・就職差別など、数々のアパルトヘイト政策が描かれているが、注目したいのは、下層白人による人種暴動と、上流白人の間に見られる「異人種混交 (amalgamation) 嫌悪」の2つである。¹²⁾

この時代の北部では、白人による黒人への集団暴力事件が頻発したのであるが、こうした人種暴動には、「人種」的な敵対意識だけでなく、「階級」闘争的なニュアンスがあったことを認識しておかなければいけない。これまで何度も言及してきたように、人種暴動の主な担い手は下層白人であるが、なかでも、アイルランド系移民の黒人に対する反感はすさまじかった。¹³⁾ もともと、「モダン」な都市国家である

イギリスでは、カトリックで粗野な農民であるが故に、アイルランド系住民は差別を受けてきたこともあり、移住先のアメリカでも、彼らは黒人と同等かそれ以下との評価をなされていたのだが、当のアイルランド系移民自身は、同じく被差別の身分にある黒人に同調するのではなく、「肌の白さ (whiteness)」を根拠に支配者の地位を手に入れようと欲した。彼らの希望が叶えられたのは、(当時、白人男性における「平等」の実現を目指していた)「民主党」の政治マシーンが、彼らを票田として取り込むために、様々な便宜をはかってきたおかげであった。とはいえ、アイルランド系移民の実態は、高度に産業化された都市生活の必要条件である「勤勉」にはほど遠く、特殊職能がないのみならず、飲酒癖ゆえに時間管理能力すらなく、文字通り、白人の最下層を形成していたのである。

それでも、社会的上昇を果たそうとするアイルランド系移民が、この「中産階級のエートス」を身につけようと苦闘していた一方で、そのような出世からは完全に締め出されている黒人は、あたかもアイルランド系移民の「かつての姿」をなぞるかのように、思いのままに飲酒に耽り、奔放な性生活を送っていると彼ら(アイルランド系移民)は思いこむようになった。すなわち、アイルランド系移民は、黒人に対して、一種「倒錯した」ルサンチマンを抱くようになるわけだが、これが、白人間での階級闘争の安全弁として機能していたのである。下層白人は、階級闘争の怒りの矛先を、(本来ならば向けるべき)支配者階級に向けるのではなく、自墮落に快楽を享受している(と勝手に想像している)黒人に向けたのである。下層白人の間で、社会の現状への不満がひよんなことから暴発すると、彼らはそれを強者に向けるのではなく、弱者という、はるかに無難なターゲットに向けたのである。

このように、人種暴動には、人種の敵対心と階級闘争が微妙なバランスでブレンドされているのであり、Webbの描く「人種暴動」でも、この2つの要素がないまぜになっている。この人種暴動の首領はMcCloskeyというアイルランド系移民であるが、黒幕として彼を操っているのが、弁護士Mr. Stevensである。アイルランド系移民はWebbにとっての「仮想敵」なので、McCloskeyの描写は多分にステレオタイプ的である。¹⁴⁾彼の最大の特徴は、酒で完全に身を持ち崩すということである。彼は殺人事件を起こすのだが、そのいきさつは、酒場で同胞と諍いをおこし、相手の背後から忍び寄り、棍棒で脳天に打撃を加えた、というものである。このMcCloskeyの弁護を引き受けるのがMr. Stevensであり、悪徳弁護士である彼は目撃者を買収し、事態を見事に收拾してみせるのだが、その見返りに、自らが計画している人種暴動に加担するようにMcCloskeyにせまる。

表向きは、McCloskeyをはじめ下層白人による「人種」暴動を装っているが、黒幕Mr. Stevensの真の狙いは経済的利潤である。彼は、人種暴動を利用して土地の転売をやろうとしている。人種暴動の主なターゲットは持ち家のある中流以上の黒人であり、Philadelphiaの黒人居住地区に頻繁に人種暴動が起きれば、住民はその不安から転出を希望し、土地を言い値で売るだろうから、Mr. Stevensはそれを買占め、その後で治安を回復させ、不動産価値が上がったところで、土地を売って大もうけをする、というのが彼のたくらみである。これだけにとどまらず、Mr. Stevensは、人種暴動のどさくさにまぎれて、Mr. Garieを殺害し、彼の莫大な遺産を相続しようと考えている。実は、Mr. Stevensの母はGarie家の出身だが、「身分」違いの結婚をしたために、勘当されたのである。今や、Garie家の生き残りは、Mr. Garieと彼の妻子だけであるが、彼の妻子は黒人の血が流れている以上、遺産の相続権は無く、Mr. Garieさえ死んでしまえば、遺産はMr. Stevensのものになるのである。

もちろん、この真意について、Mr. Stevensは誰にも一切口外せず、暴動の動機を説明する際には、必ず「人種」的な理由づけを行うが、それでも、McCloskeyもそうしたもっともらしい動機の裏に、何か「人種」以外の要素があることに気づいている。

“Married to a nigger!” exclaimed McCloskey—“it’s a quare taste the animal has—but you’re not afther killing him for that; there’s something more behind: it’s not for having a black wife instead of a white one you’d be afther murdering him—ye’ll get no stuff like that down me.”

“No, it is not for that alone, I acknowledge,” rejoined Mr. Stevens, with considerable embarrassment. “He insulted me some time ago, and I want to be revenged upon him.” (179-80)

Mr. Stevensは、白人のMr. Garieを暴動のターゲットにする理由を、異人種混交を促進する「奴隷制度廃止論者」だからだ、と説明するが、McCloskeyは、そこにそれ以上の何かがあることに気づいている。ここで注目すべきは、下層白人のMcCloskeyにとって、異人種混交は、それを行ったからといって、ただちに関係者を（リンチで）処罰しなければいけないほど、「(慣習上の) 犯罪行為」ではない、ということである。確かに、奴隷解放後の南部では、異人種混交を理由に、下層白人暴徒によるリンチが多発したが、「植民地」時代のアメリカでは、下層白人と黒人

の結婚が行われていたのも事実であり、17世紀末には、Marylandで、こうした異人種混交を禁じる法律が制定されている。¹⁵⁾ 自由州の北部では、(奴隷州の南部とは違って、) 上流の白人よりも、下層白人のほうが、はるかに頻繁に交流の機会があっただろうし、また、黒人が近くにいるからこそ、彼らが独特の「ルサンチマン」を醸成することになったのだと思われる。

McCloskeyの鋭い指摘に対し、Mr. Stevensは、それを認めた上で、Mr. Garieに「リベンジ」をしたいからだと誤魔化している。しかし、Mr. Stevensの母は、下層白人と結婚したことにより、Garie家から勘当されてしまったわけだから、Mr. Garieに対する彼の殺意には、階級闘争の含みもあることは否定できない。その意味では、「リベンジ」を持ち出すMr. Stevensの用語法は、あながち「的外れ」とは言えない。

人種暴動のように、黒人への反感が「暴力」として現れた一方で、下層白人が「かつての自分たち」を黒人にノスタルジーとして投影した場合、それがminstrelsyという形をとることがあった。この時代には、下層白人の間で、「肌を黒塗りした下層白人演者による黒人パフォーマンス」が人気を博したのであるが、彼らにとって、肌を黒塗りすることのメリットは、都市労働者としては一種のタブーである、「感傷に耽る」ことが可能になるという点である。肌を黒塗りした白人演者は、黒人の姿を借りることで、牧歌的な田園生活へのノスタルジーを思いのままに吐露することができたのである。

minstrelsyの演目として、無知な黒人が登場して観客の笑いをとる、という「お決まり」のものがあったが、こうしたギャグは当時の文学にもかなりの影響を与えていた。¹⁶⁾ 代表的なものを挙げると、Harriet Beecher Stoweの*Uncle Tom's Cabin* (1852)の黒人少女Topsyが、いたずらを通じて「 minstrel・ギャグ」を演じるが、「ステレオタイプ化された黒人像」を嫌う*The Garies*においても、このようなギャグが出てくることは興味深い。Warmouthの日曜学校に、Aunt Comfortという黒人老婆がやって来るのだが、彼女こそ、この小説でただ1人の minstrel・ギャグ演者なのである。家事の能力に関する限りでは、Aunt Comfortは完璧なのだが、生まれ育った時代のせいで、全く文字を読むことができない。彼女が生み出すギャグを1つ挙げておくと、初回の授業で、アルファベット表記法を学習するのだが、Aunt Comfortには「OとQの違い」が全く理解できず、「尾っぽ」があるかどうかで2つの違いが決まってしまうなんてインチキだと言ってきかない。

“Umph,” grunted the old woman, incredulously, “what’s de use of saying dat’s a

Q, when you jest said not a minute ago 'twas O?"

"This is not the same," rejoined the teacher, "don't you see the little tail at the bottom of it?"

Aunt Comfort took off her silver spectacles, and gave the glasses of them a furious rub, then after essaying another look, exclaimed, "What, you don't mean dat 'ere little speck down at the bottom of it, does yer?" (247)

ただし、この場面のような minstrel・ギャグは、*The Garies* という小説を小説らしくするための精一杯の「譲歩」であったことは想像に難くない。むしろ、Webb は、黒人ステレオタイプの温床であった minstrelsy を茶化することに心血を注いでいる。

人種暴動において、攻撃のターゲットを絞り込んだ Mr. Stevens は、それを書き込んだメモを渡そうと、McCloskey たち下層白人のたまり場である酒場を訪ねるが、中流の白人（弁護士）である彼が、通常の服装でそこに入出入りすることはあまりに人目につくので、わざと「身なり」をやつして酒場に向かうことにする。（その目的で、Charlie の親友 Kinch の父が経営する古着屋を利用するが、そこでメモを落としてしまい、これを手に入れた Walters は暴徒の襲撃に備えることができたのである。）しかし、McCloskey にも会えず、肝心のメモも失くしてしまった Mr. Stevens は、落胆して家路につくが、Philadelphia には、各地区に「(下層白人を構成員とする) 自警消防団」があり、みすぼらしい姿をしていたために、ある消防団からライバル団の構成員と間違えられ、殴る蹴るの暴行を受ける。その仕上げに、Mr. Stevens は「タール」で肌を黒塗りされてしまい、暴行によって膨らんだ唇と合わせて、黒人以外のものには見えなくなってしまう：“They [the members of a notorious fire company] then dragged him [Mr. Stevens] into a wheelwright's shop near by, where they obtained some tar, with which they coated his face completely. 'Oh! don't he look like a nigger!'” (188)。¹⁷⁾ さらに、Mr. Stevens は酔っぱらいにからまれ、minstrelsy の黒人芸をさんざんやらされたあと、「立派な市民」になるためにチョークで肌を白塗りされてしまうのである。“[. . .] he was industriously engaged in streaking the face of Mr. Stevens with lime, 'Let me alone, Morton—let me alone; I'm making a white man of him, I'm going to make him a glorious fellow-citizen, and have him run for Congress. Let me alone, I say.'” (191)。¹⁸⁾

McCloskey 率いる暴徒は、まず Mr. Ellis の家を破壊したあと、Walters の家を破

壊しにやって来るが、ここでは撃退されてしまう。最後に、Mr. Garieを殺しにやってくるが、McCloskeyは怖気づき目的を果たせず、代わりに、隣人のMr. Stevensが彼を銃殺する。このどさくさにまぎれて、McCloskeyは、将来に備えて、Mr. Garieの「遺書」を懐に忍ばせる。これがあればMr. Stevensの相続権は無効になるので、後日、彼はMr. Stevensをゆすり、酒浸りの生活を送る。McCloskeyは、チフスにかかって死んでしまうが、死ぬ間際に「遺書のありか」と「過去の罪」を告白し、翌日Mr. Stevensも逮捕される。ここで初めて、ClarenceとEmilyの遺産相続権が証明され、2人は莫大な富を手にする。

人種暴動のエピソードで最も印象に残る出来事は、勤勉な中産階級の黒人Mr. Ellisの「身体」に加えられる暴力である。¹⁹⁾ 彼は、手先の器用な「職人」であり、Ellis家の大黒柱として、家族・友人からの尊敬を集めているが、Waltersとともに暴徒を撃退したあと、友人Garie夫妻の安否が気がかりで、「暴徒への備え」を警告するために家を飛び出す。不運にも、彼は目的地に至る前に暴徒に発見され、ビルの屋上へと避難するが、そこで指を切り落とされた挙句、地面に突き落とされるのである。仕事一筋で生きてきたMr. Ellisにとって、指を失ってしまうことは、「(象徴的な)死」を意味しており、実際に、暴動以後の彼は廃人となってしまう、「悲劇」の記憶装置としてのみ機能する。

ここまでは、社会のメインストリームに同化しようとする黒人への、下層白人の「暴力」的な反応を見てきたが、ここからは、上流（および中流）階級の白人の反応を見ていくことにしよう。もちろん、同化を果たそうと努力する黒人が最終的に行きつくところが、何らかの形での「異人種混交」であることは言うまでもない。²⁰⁾ 黒人が社会進出を果たせば異人種混交が起こる、というのは、当時の白人が常に抱いていた恐怖であるし、人種差別主義者は、このことを大義名分に、黒人差別を正当化してきた。この恐怖は、下層階級にとどまらず、中・上流階級の白人の想像力をも同程度かそれ以上に強く刺激していたのであるが、後者の反応は、前者のそれほどには、(暴力を伴う)破壊的なものではなかった、と言ってよいであろう。²¹⁾ 要するに、階級が上昇したからといって、差別意識が弱まるわけではないが、反応としては、あまりあからさまなものにはならない、ということである。*The Garies*でいえば、人種暴動を計画する段階で、Mr. Stevensがわざわざ身をやつて下層白人のたまり場を訪れた事例が分かりやすいであろう。Mr. Stevensは、彼のような中流の白人が人種暴動に加担していることを周りに悟られたくなかったので、下層階級に変装したのである。²²⁾ 同じように、彼の妻Mrs. Stevensも、彼女の子供が通う学

校から、混血のClarence, Emilyを排除しようとする際に、暴力を持ち出すようなことはない。彼女のやり方は、他の生徒の保護者の同意を取りつけて、問題の2人を即刻追い出さなければ、先生は「奴隷制度廃止論者」とみなされ、多くの保護者が彼らの子弟を学校から引き揚げさせることになるだろうと、教師に圧力をかけるのである。

さらに上流の白人となると、異人種混交への反応も、もっと隠微なものになる。*The Garies*においてこのことを確認するためには、passing（肌の白い黒人が白人のふりをする）について分析をしなければいけない。改めて言うまでもなく、passingは、白人が維持しようとしてやっきになっているcolor lineを攪乱させる側面を持っている。ただし、注意しなければならないのは、全てのpassingが、このような「白人への反抗的な身振り」を持っているわけではない、ということである。あるpassingがcolor lineの恣意性を暴くことを主目的にしている一方で、他のpassingは、白人への同化こそが主目的であり、この場合、color lineの侵犯は副次的産物にすぎないのである。

賢明にも、Webbはこの2つの場合を別々に扱っている。*The Garies*にはどちらのpassingも描かれているのであり、反抗的なpassingの主人公はGeorge Winston、協調的なpassingの主人公はClarence Garieである。Georgeは南部出身の元奴隷で、北部での人種差別の状況を知るために、Philadelphiaへとやって来る。彼は、黒人嫌いの紳士淑女のところに入りし、彼らが「彼の正体」に気づいていないことを、友人Mr. Ellisに話して悦に入っている。しかし、Webbのような穏健派には、これほど反抗的な黒人の人生を具に語ることはできないし、また、そうするつもりもないので、Georgeはすぐに物語からfade outしてしまう。しかも、白人と完全に見分けがつかないまでに、Georgeが彼らの社会奥深くに入りこんでしまうが故にfade outするのではなくて、「完全なpassing」などあり得ないことを彼が悟り、アフリカに機会を求めた、と読者は半ば「肩透かし」を食わされるのである。

こうしたGeorgeとは異なって、Clarenceは、黒人にではなく、むしろ白人に「自分の姿を重ね（identify）」ている。Clarenceにとって、passingは、心の底で白人にしかめ面をしてみせることではなくて、そうすることによって最大限の恩恵を得るためのものである。悪く言えば、彼のpassingは、「白人にこびる」それなのである。それを証拠に、彼は、状況次第で、「黒人を悪しざまに罵る」こともやってのけるのである。Clarenceは、上流階級のMiss Batesと恋仲にあり、Bates家の人々は「黒人嫌い」である。彼らと席をともにしているときに、「黒人」が座の話題になる

と、Clarenceも、彼らと同じように、「黒人の劣等性」を口にしてはばからない。もちろん、そうしながらも、(黒人である)彼の母への「やましさ」も感じているのだが、それでも、優先すべきは、(白人である)Bates家の面々に合わせることなのである。さらなる証拠としては、Clarenceが、Charlieと妹Emilyの結婚に反対していることが挙げられる。妹が黒人と結婚してしまえば、白人として生きていくつもりClarenceとは、完全に別々の人生を歩むことになるが、彼はこの別離を受け入れたくないで、妹にも同じようにpassingしてほしいと考えている。

このように、Clarenceのpassingには、color lineの恣意性を暴きたて、白人の「鼻を明かす」反抗的な身振りはどこにもないのだが、ここで私たちは、彼が置かれているのは、「アメリカ」という極めて特殊な状況であることに留意したい。白人との同化を目指す黒人が最終的に行きつくのは、白人を配偶者にしようとするところであるが、白人の見地に立てば、これこそがまさに自分たちが最も恐れている事態である、ということ私達は考慮しなければいけないのである。Clarenceの文脈で言えば、彼が白人Miss Batesとの結婚を望むのは「自然 (natural)」な成り行きなのだが、これはあくまでもClarenceの立場から物事を見た場合に限られ、彼女の父Mr. Batesからすれば、娘が黒人と結婚するのは「不自然 (unnatural)」極まりないわけである。先程確認した通り、Clarenceのpassingは「白人にこびへつらう」ためのそれであったわけだが、その「へつらい」が最後の審級に達するやいなや、それは「異人種混交」というアメリカ最大のタブーに触れてしまうことになるのである。

Clarenceの願望は、結局叶えられずに潰えてしまうのだが、その失敗のプロセスは、白人の間で「異人種混交」の忌避が、いかに根強く彼らの意識の奥底に巣食っているのかを明白に示している。Clarenceは、良心のすすめにしたがって、婚約者Miss Batesに、自分の「出自」を打ち明けようと何度も決心するが、彼女を失いたくないかという恐怖から、そうできないでいる。そのために、Clarenceは、自分の正体がばれるかもしれないという不安にいつもおののき、自らを衰弱させている。そして、ついに彼が恐れていた事態がやって来る。Clarenceが婚約者、彼女の友人Miss Ellstoweとくつろいでいるところに、Miss Ellstoweにお目通りを願って、「(Clarenceの)幼なじみ」のGeorge Stevens (Mr. Stevensの息子) がやって来る。この悪党に自分の正体が暴露されることを悟ったClarenceは真っ青になり、そそくさとその場から離れようとする。

But it was too late; one glance at the contemptuous, malignant face of the son of his

father's murderer, told him his fate was sealed—that it was now too late to avert exposure. He grew faint, dizzy, ill, —and rising, declared hurriedly he must go, staggered towards the door, and fell upon the carpet, with a slight stream of blood spirting from his mouth. (346-47)

去りしなに、Clarenceはつまずき倒れてしまい、口から血の泡をふき出してしまうが、彼の「黒人性」が問題になる文脈で、「血」への言及がなされるのは、なんとも皮肉なことである。実際には、白人・黒人を隔てる「血」の相違というのは存在しないが、それでも、一般には、そのような「血」が存在すると考えられてきたのであり、そして、このメタファーこそが、白人・黒人を分ける最大の根拠だとされてきたのである。

Clarenceが去った後、Georgeは注進のためにMr. Batesのもとを訪れる。彼がClarenceの正体を告げるやいなや、Mr. Batesは大変なショックを受けてしまう。

“HE IS A COLOURED MAN,” answered George Stevens, briefly. Mr. Bates became almost purple, and gasped for breath; then, after staring at his informant for a few seconds incredulously, repeated the words “Coloured man,” in a dreamy manner, as if in doubt whether he had really heard them. (351)

この場面で最も注目に値するのは、Mr. Batesが、長らく付き合いのあったClarenceの「人となり」ではなく、初対面のGeorgeの証言のほうをやすやすと信じてしまうことである。もちろん、Georgeは、自分が見てきたGarie家の歴史にも触れて説明をしているのだが、Mr. Batesには、その言葉の裏をとろうなどという発想は無縁である。それどころか、普段は知的で温厚な紳士であるMr. Batesまでもが、「あの破廉恥漢を殺してやる」と息巻くのである。落ち着きを取り戻したあとClarenceに最後通告を伝えに来たMr. Batesは、以下のように「娘の前婚約者」を非難する：“I wish you had died long ago; then you would have never come beneath my roof to destroy its peace for ever. You have acted basely, palming yourself upon us—counterfeit as you were! and taking in exchange her true love and my honest, honourable regard.” (353)。要するに、Mr. BatesはClarenceを「うそつき」「裏切り者」と罵っているわけだが、我々読者は、ここにMr. Batesの差別意識をはっきりと見て取ることができる。彼にとって、「結婚（婚約）」とは、双方が白人であると

いう大前提に基づいてなされるべきであり、いかにClarenceが人品卑しからぬ紳士であったとしても、彼には「黒人の血」が流れている以上、彼の行為はこの大前提を侵犯した裏切り行為と判断されても仕方がない、というわけである。

人生最大の目標であったMiss Batesとの結婚に破れたClarenceは、New Yorkを引き払い、妹Emilyの住むPhiladelphiaで衰弱死するのだが、死の間際になって、彼はMiss Batesにもう一度だけ会いたいと、彼女に手紙を書き送る。失恋以降、絶望から心を完全に閉ざしていたMiss Batesは、父親を説得してClarenceに一目会いにやって来るが、この再会の場面はWebbには描き得ない。彼女の到着を待ちわびているClarenceは、彼女が彼の部屋の敷居をまたごうとするその瞬間に、息絶えてしまうのである。どういうわけか、作者Webbは、「白人と黒人の結婚」という究極の同化を書くのをためらっており、その代りに、Clarence、Miss Batesとも絶望から夭折し、あの世において堅く結ばれるというセンチメンタルな結論でお茶を濁しているのである。

しかし、Webbは、「(地上での) 白人と黒人の結婚」という問題に最も強く拘泥していたようで、本来小説をそこで終わらせるべき「CharlieとEmilyの結婚式」を最終章に据えるのではなく、「Clarenceの死」をそこで展開させていることは注目に値する。彼もやはり心のどこかで、黒人の完全な同化を許さない「アメリカの闇」に気づいていたと思われるが、常に自分のルーツを語ることから尻込みしてしまうClarenceと同じく、最終的にはこの問題を隠蔽してしまうことを選ぶのである。それ故に、最終章も、Clarenceの死で終わるのではなく、最後の1ページで申し訳程度「ハッピーエンド」がつけ足されているのである。

IV. おわりに

この論考の前半では、「いかに黒人が白人に同化するのか」という問題に対する黒人作家Frank Webbの解答を示し、後半では、そうした戦略に垣間見ることのできる「危うさ」を見てきたのだが、このようにWebbの「矛盾」「あいまいさ」を指摘することで、私は彼を非難したいのではない。「洞察」と「盲点」を併せ持つことは、何もWebbや彼の作品*The Garies*だけに内在する問題なのではなく、「文学」ひいては「人間」全てが抱えている問題でもある。Webbの*The Garies*には、十分にリアルな黒人問題の現状認識とそれへの提言の両方が書かれており、「矛盾」はそれ故の「矛盾」なのである。率直に言えば、Webbは約半世紀ほど時代に先んじており、彼のよ

うな「白人との同化」志向の黒人が脚光を浴びるのは、Booker T. Washingtonの登場以降であり、彼の代名詞とでも言うべき1895年の「アトランタの妥協 (the Atlanta Compromise)」演説と前後して、Frances Ellen Watkins Harper, Pauline Hopkins, Charles Chesnuttらの作家が、中産階級のエートスを身につけて社会進出を果たそうとする黒人を主人公にした小説を執筆している。Washingtonをはじめとするこれらの人物は、悪く言えば、「白人にこびへつらう」黒人として、現在ではあまり高く評価されることはなく、むしろ、彼らを乗り越えようとしたHarlem Renaissanceの文人を評価するのが現在の趨勢である。²³⁾ しかし、また、Zora Neale Hurstonの*Their Eyes Were Watching God* (1937)のように、「中産階級のエートス」を完全に否定することにも全く問題がないわけではなく、この作品を単独でみた場合、「近代化（馴致）不可能な黒人」という前世代が超克しようとやっきになったステレオタイプを再生産してしまうことになりかねない。やはり、Hurstonに否定されるべき存在としてのHarper, Hopkins, Chesnuttがいたからこそ、彼らとのintertextuality（作品同士の相互作用）があってはじめて、我々現代人はHurstonの作品の意義を十全に理解できるのである。この論考を書いている現在（2010年3月）、New JerseyのWalmartで（黒人）人種差別事件が起こったとのニュースを耳にしたが、人種差別は未だにアメリカ人の意識に根強くはびこっているものであり、このことを考え合わせると、Webbが提出してみせた問題圏域は、過去の遺物ではなく、現在進行形の「歴史」を形作っているのである。

Notes

- 1) ただし、Blakeの結論部分は失われて発見されておらず、現在我々が読むことはできない。
- 2) そもそもこの物語のタイトルからして、白人と黒人を並列した*The Garies and the Ellises*ではなく、*The Garies and Their Friends*と白人優位のものになっている。伝記的事実をひも解いてみると、Webbは他に2つの中編小説を書いているが、ともにヨーロッパの白人上流階級の生活を描いたものである（Gardner 302）。
- 3) Claudia Tateは、Frances Ellen Watkins Harperをはじめとする「メインストリームに妥協した」作家たちこそ、Zora Neale Hurstonのような「真の」黒人女性作家の先駆けだとしている：“These novels of ‘genteel domestic feminism’ are direct precursors of *Their Eyes Were Watching God*, and their authors, Hurston’s literary predecessors” (4)。

4) Foucaultの*Discipline and Punish: The Birth of the Prison* (1975)には、パリの監獄の「タイムテーブル」が引用されている(6-7)。監獄と同じく、すぐれて近代的な「制度 (institution)」である学校のそれも、やはり監獄のものと同じ響きを持っている。Up from Slavery (1901)の中で示されている、Booker T. WashingtonのTuskegee Normal and Industrial Instituteのタイムテーブルは、本質的に、パリの監獄のそれと変わるところはない。

5 A.M., rising bell; 5.50 A.M., warning breakfast bell; 6 A.M., breakfast bell; 6.20 A.M., breakfast over; 6.20 to 6.50 A.M., rooms are cleaned; 6.50, work bell; 7.30, morning study hour; 8.20, morning school bell; 8.25, inspection of young men's toilet in ranks; 8.40, devotional exercises in chapel; 8.55, "five minutes with the daily news;" 9 A.M., class work begins; 12, class work closes; 12.15 P.M., dinner; 1 P.M., work bell; 1.30 P.M., class work begins; 3.30 P.M., class work ends; 5.30 P.M., bell to "knock off" work; 6 P.M., supper; 7.10 P.M., evening prayers; 7.30 P.M., evening study hour; 8.45 P.M., evening study hour closes; 9.20 P.M., warning retiring bell; 9.30 P.M., retiring bell. (201-02)

そもそも、この学校の名称からして、norm, industryを産み出すという「矯正装置」の性格がありありと示されている。アメリカ文学史上最も有名な「タイムテーブル」は、F. Scott Fitzgerald, *The Great Gatsby* (1925)のそれだと思われるが、そのタイムテーブルの下には、「禁酒 ("No wasting time at Shafters [. . .])" 「禁煙」「清潔」などの実践すべき徳目も書き込まれており、Minnesotaの貧農出身の大金持ちが、中産階級のエートスを身につけようと刻苦奮闘していたことがうかがい知られる (173)。

5) 「召使い」と「職人」という用語にまつわるconnotationについては、David Roedigerの*The Wages of Whiteness: Race and the Making of the American Working Class*を参照のこと (43-54)。また、アメリカの民主主義を高らかに歌い上げたWalt Whitmanの"I Hear America Singing" (1860)には、"Those of mechanics, each one singing his as it should be blithe and strong" (174)という1節があり、このあとで「職人」と同じ階級レベルの職業がカタログ的手法で列挙されるが、当然、このカタログに「召使い」は含まれていない。

6) 「悲劇的な混血プロット」を採用している初期の文学作品として、Brownの*Clotel*の主なソースでもある、Lydia Maria Childの短編小説"The Quadroons" (1842)を挙げておく。

7) Anna Mae Duaneは、Webbが自身のテキストを「ジェンダー」化していることを

積極的に評価している：“When read against the frustration and ambivalence of his contemporaries, Webb’s insistence on empowering the black female body marks him as one of the earliest and strongest voices advocating an alternative, distinctly black standard of womanhood” (211)。私も彼女に賛同するのに吝かではないが、それでも、私はここにWebbの小説作法の限界を読み取ることの方にはるかに強く肩入れをしているのである。

- 8) 独立自営農民を理想とするアメリカにおいて、自宅を所有することの重要性は強調してもしすぎることはない。この「アメリカン・ドリーム」が虚構にすぎないことは、1929年に始まる「大恐慌」で最も鮮明に示されたわけだが、その再建計画とも言うべきNew Dealが大衆の大きな支持を集めた理由の1つに、Franklin Delano Rooseveltが強力に「住宅供給政策」を推し進めたことがある。また、Eddie Cantor主演の映画*Roman Scandals* (1933)の挿入歌“Build a Little Home”は、人々が協力し合って暮らせば何もない野原も「家 (home)」になる、という趣旨のものである。もっと有名な例も挙げると、Walt Disneyによる漫画映画*Three Little Pigs* (1933)は、“Who’s Afraid of the Big Bad Wolf?”という歌に合わせて物語が進行する一種のミュージカルであるが、その結論は、Practical Pigが「勤勉」にレンガ造りの「家」を建てることで、「不況」を象徴するオオカミをやり過ごす、というものである。
- 9) Otterはさらに進んで、この小説の「両義性」を説明するために、オランダ静物画vanitasになぞらえる。オランダ静物画は、「繁栄」を描き出すのと同時に、「メメント・モリ」を象徴する「骸骨」を描き入れる点に特徴がある：“[...] Webb presents scenes that are characterized by what we might call a still-life aesthetics [...]. The surfeit conveys achievement as well as precariousness [...].” (745)。
- 10) アメリカ文学において、このようにdomesticな領域をsanitizeする象徴的人物は、Nathaniel Hawthorne, *The House of the Seven Gables* (1851)のPhoebe Pyncheonであろう。田舎から都会へとやってきた彼女は、それまで薄暗かった屋敷に「光」を導き入れる存在である。
- 11) 一見無害に見えるdomesticityも、その表向きの皮をはいで見ると、全く異なる様相を呈することに注意しなければいけない。アメリカ文学研究における記念碑的著作*The Anarchy of Empire in the Making of U.S. Culture*で、Amy Kaplanは、Manifest Destinyという「帝国主義的領土拡張」のロジックとdomesticityのその共犯関係を暴き出している。

Under the self-contained orderly home lies the anarchy of imperial conquest. Not a

retreat from the masculine sphere of empire building, domesticity both reenacts and conceals its origin in the violent appropriation of foreign land. Buried in the pit closely accessible to the domestic space, ghosts from prior imperial encounters haunt the self-enclosed household of the family and the nation. “Manifest Domesticity” turns an imperial nation into a home by producing and colonizing specters of the foreign that lurk inside and outside its ever-shifting borders. (50)

Kaplanの分析は、*The Garies*と同時代の白人女性作家の著作を扱ったもので、Webbのような黒人作家はその射程に入っていないのであるが、*Caddy*の「暴力」をすでに目撃している我々は、この分析が*The Garies*にも適用可能なことを否定し得ない。

- 12) *The Garies*の舞台は北部であるが、それでも様々な人種隔離政策が描かれている。Jim Crowと総称されるアパルトヘイトは、再建時代終了以降の南部でよく知られているが、その起源は南北戦争前の北部にあったことには注意しなければいけない：“One of the strangest things about the career of Jim Crow was that the system was born in the North and reached an advanced age before moving South in force” (Woodward 17)。また、C. Vann Woodwardが参照しているAlexis de Tocquevilleは、“Racial prejudice seems to me stronger in the states that have abolished slavery than in those where slavery still exists, and nowhere is intolerance greater than in states where servitude was unknown”と述べているが、Mr. GarieのおじUncle Johnも、北部にこそもっと激しい人種差別があると主張し、甥の移住を思いとどませようとする (395)。
- 13) アイルランド系移民ではないが、南北戦争以前 (1856年) にVirginia山岳地帯に住む最下層の白人が黒人に対して持つ「敵愾心」を、Willa Catherは*Sapphira and the Slave Girl* (1940)に書き留めている：“[. . .] but you know none of those mountain boys will work along with coloured hands.’ ‘Yes, I know.’ Mr. Fairhand sighed. ‘It’s the one thing they’ve got to feel important about—that they’re white. It’s pitiful.” (823-24)。今でもこのアパラチア山脈地帯は全米ワーストの貧困地帯であるが、その一端は、Toni Morrisonの*Song of Solomon* (1977)からも窺い知ることができる。
- 14) *The Garies*はまずイギリスで出版されたので、アイルランド系を悪く書けばそれだけイギリスの読者から共感を得られたことであろう。
- 15) *The Garies*の同時代のテキストにはHarriet Wilsonの自伝的小説*Our Nig; or, Sketches from the Life of a Free Black, in a Two-Story White House, North, Showing That Slavery’s Shadows Fall Even There* (1859)があるが、その主人公の母

は白人でありながら、黒人を夫にしている。ただし、彼女は好き好んでそうしたのではなく、身を持ち崩し白人社会から「村八分」の状態に置かれ、生計を立てていくために、やむにやまれずそうしてしまったという部分もある。

- 16) Eric Lottの言葉を借りれば、むしろ、minstrelsy無くして我々が今知るとようなアメリカ文学・映画は無かったと言い切れるぐらい、それが文学に与えてきた影響は大きいのである：“Without the minstrel show there would have been no *Uncle Tom’s Cabin* (1852), no *Adventures of Huckleberry Finn* (1884) [...]” (5)。彼の主張の根拠となっているのが、Leslie Fiedlerが*Love and Death in the American Novel* (1960)で展開しているアメリカ文学論で、Fiedlerによれば、アメリカ文学とは、白人と黒人を巡るゴシック構造を中心に形成されてきたのである。

- 17) この場面に、Anna Engleは別の「パロディー」を読みこんでいる。

In the attack on Stevens, working-class firemen express their power over him by transforming a class similarity into a racial difference, painting the supposedly working-class Stevens black. This scene illustrates and even parodies the blackening of the Irish working class occurring throughout mid-nineteenth-century American literature and culture. (160-61)

また、Robert Nowatzkiは、このエピソードから、Webbが「構築主義」的な人種観に気づいていたと指摘しているが、彼も言っているように、当時の時代状況を勘案すると、現代知識人ほど鮮明に意識していたとは到底考えられない：“[...] Webb was one of the first American authors to recognize the socially constructed, indeterminate nature of racial categorization and its dangerous effects” (52)。

- 18) これ以外で反minstrelsyエピソードと考えられるものは、白人にこびへつらうときは黒人英語を使う一方で、仲間との会話では標準英語を使うホテルのボーイが出てくる以下の場面である。

“Oh, no sir! no sir!” replied Ben, “I was sot free—and I often wish,” he added in a whining tone, “dat I was back agin on the old place—hain’t got no kind marster to look after me here, and I has to work drefful hard sometimes. Ah,” he concluded, drawing a long sigh, “if I was only back on de old place!”

“I heartily wish you were!” said Mr. Winston, indignantly, “and wish moreover that you were to be tied up and whipped once a day for the rest of your life. Any man that prefers slavery to freedom deserves to be a slave—you ought to be ashamed of yourself. Go out of the room, sir, as quick as possible!”

“Phew!” said the astonished and chagrined Ben, as he descended the stairs; “that was certainly a great miss,” continued he, talking as correct English, and with as pure Northern an accent as any one could boast. (39-40)

ボーイのBenは、George Winstonの「白い肌」から彼を南部上流白人だと判断して、「地下鉄道」の活動資金となる金をせびろうとしているのである。minstrelsyでは、普段、標準（白人）英語を話す演者が、肌を黒塗りし金儲けする間だけ、黒人英語を話すわけだが、Benは黒人でありながらこのパフォーマンスをなぞっているのである。

19) 大勢の白人暴徒が1人のあわれな黒人をなぶりものにして不具にしてしまうのは、あたかも後代の「リンチ」を見ているようであるが、「人種暴動」にしても「リンチ」にしても、ターゲットを黒人の「精神」ではなく「身体」に定めていたのは大変に興味深い。黒人が「近代」の要請に応じて「精神」の陶冶に努めているのに対し、白人暴徒は「前近代」的な（「見世物」としての）「身体」刑を反復しているのである。

20) Webbより半世紀ほど後の同化主義者Charles Chesnutは、エッセイ“The Future American”（1900）で、異人種混交こそが必然的結果であると主張している。彼は、“In North Carolina, marriage between white persons and free persons of color was lawful until 1830”と、異人種混交罪が超歴史的事実ではないことを示したあと、異人種混交をタブー視するのは白人の偏見にすぎないし、こうした（普遍的でない）偏見も近いうちに無くなるだろうと希望的観測を述べている：“This prejudice loses much of its importance, however, when it is borne in mind that it is almost purely local and does not exist in quite the same form anywhere else in the world [. . .]”（856, 858）。こうしたFuture Americanへの危機感を最も雄弁に示しているのが、William Faulknerの*Absalom, Absalom!*（1936）である。

I think that in time the Jim Bonds are going to conquer the western hemisphere. Of course it wont quite be in our time and of course as they spread toward the poles they will bleach out again like the rabbits and the birds do, so they wont show up so sharp against the snow. But it will still be Jim Bond; and so in a few thousand years, I who regard you will also have sprung from the loins of African kings. (311)

Jim Bondは混血の男性だが、この1節は、「アメリカ」がいかに「黒人の血」にこだわっているのかをあまりにも雄弁に示している。私がいつも不思議に思うのは、1897年生まれ、FaulknerがChesnutのエッセイを読んだ可能性は限りなくゼロに近いが、それにしても、あまりにも多くを先人から受け継いでいることである。

- 21) Faulknerの*Light in August* (1932)をひも解けば、異人種混交に対する「階級」別の反応を知ることができる。中流以上の白人女性Joanna Burdenが、黒人らしき男に「レイプ」された推測に対しては、下層白人暴徒が騒ぎたてる一方で、黒人の子を身ごもっている可能性が極めて高いLena Groveに対しては、彼女が一見して貧乏白人だと分かるせいか、誰も行動を起こさないのである。もちろん、WebbとFaulknerでは、生きた時代も場所も異なるのであるが、異人種混交という問題に関する限り、時代の相違は問題にならないように思われる。事実、Charles Chesnuttの研究者Matthew Wilsonは、Philip Roth, *The Human Stain* (2000)を読んだ際に、両者の作品の間には100年の隔たりがあるにもかかわらず、ほとんど同じ人種観が描き出されていることに驚き、以下のように述べている：“Despite the dismantling of the legal system of American racial apartheid that had its origin in Chesnutt’s lifetime, the American racial imagination remains largely intact, and we continue to insist on our racial binary, continue to maintain and police the color line” (138)。
- 22) 人種暴動を裏で操っていながら表向きには関わりがないように見せかける、というMr. Stevensのやり方は、中・上流階級の人種差別主義者の典型的な振舞いである。再建時代の終了以降、南部でも人種暴動が多発し、1898年にWilmington, North Carolinaで起きたそれを題材に、Charles Chesnuttが小説*The Marrow of Tradition* (1901)を書いている。その中で、新聞社を所有するMajor Carteretは、自ら暴動を扇動する記事を書きながら、暴動の当日は、その主たる関係者だと思われるのを避けるために、極力目立たないように行動するのである。
- 23) Webbのように、「白い黒人」が社会的に向上する物語は、当時の大多数の黒人の「現実」を正確に写し取っていないとして、非難されることがよくある。こうした非難に対して、最も有効な反論を投げかけているのがAnn duCilleである：“Reading these early texts as a kind of ‘white-faced minstrelsy,’ as Baker does, severs them from the political, racial, and literary imperatives of their particular historical moments” (8)。彼女の反論は、ここまで私が展開してきた主張と瓜二つと言って差し支えないが、それでも、Houston Bakerのような批評家にある程度同意することもできるのは、(白い)黒人の向上といった、道徳的に正しい物語が必ずしも「読み物(小説)」として面白いとは限らないからである。

Works Cited

Cather, Willa. *Later Novels*. Ed. Sharon O’Brien. New York: Lib. of America, 1990.

- Print.
- Chesnutt, Charles. *Stories, Novels, and Essays*. Ed. Werner Sollors. New York: Lib. of America, 2002. Print.
- Duane, Anna Mae. "Remaking Black Motherhood in Frank J. Webb's *The Garies and Their Friends*." *AAR*. 38.2 (2004): 201-12. *JSTOR*. Web. 25 Mar. 2010.
- duCille, Ann. *The Coupling Convention: Sex, Text, and Tradition in Black Women's Fiction*. New York: Oxford UP, 1993. Print.
- Engle, Anna. "Depictions of the Irish in Frank Webb's *The Garies and Their Friends* and Frances E. W. Harper's *Trial and Triumph*." *MELUS*. 26.1 (2001): 151-71. *JSTOR*. Web. 25 Mar. 2010.
- Faulkner, William. *Novels 1936-1940*. Ed. Joseph Blotner and Noel Polk. New York: Lib. of America, 1990. Print.
- Fitzgerald, F. Scott. *The Great Gatsby*. New York: Scribner, 1925. Print.
- Foucault Michel. *Discipline and Punish: The Birth of the Prison*. Trans. Alan Sheridan. New York: Vintage, 1977. Print.
- Gardner, Eric. "'A Gentleman of Superior Cultivation and Refinement': Recovering the Biography of Frank J. Webb." *AAR*. 35.2 (2001): 297-308. *JSTOR*. Web. 25 Mar. 2010.
- Kaplan Amy. *The Anarchy of Empire in the Making of U.S. Culture*. Cambridge: Harvard UP, 2002. Print.
- Lott, Eric. *Love and Theft: Blackface Minstrelsy and the American Working Class*. New York: Oxford UP, 1993. Print.
- Nowatzki, Robert. "Blurring the Color Line: Black Freedom, Passing, Abolitionism, and Irish Ethnicity in Frank J. Webb's *The Garies and Their Friends*." *Studies in American Fiction*. 33.1 (2005): 29-58. Print.
- Otter, Samuel. "Frank Webb's Still Life: Rethinking Literature and Politics through *The Garies and Their Friends*." *ALH*. 20.4 (2008): 728-52. Print.
- Roediger, David R. *The Wages of Whiteness: Race and the Making of the American Working Class*. 1991. London: Verso, 1999. Print.
- Tate, Claudia. *Domestic Allegories of Political Desire: The Black Heroine's Text at the Turn of the Century*. New York: Oxford UP, 1992. Print.
- Tocqueville, Alexis de. *Democracy in America*. Trans. Arthur Goldhammer. New

- York: Lib. of America, 2004. Print.
- Washington, Booker T. *Three Negro Classics*. Ed. John Hope Franklin. New York: Avon, 1965. Print.
- Webb, Frank J. *The Garies and Their Friends*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1997. Print.
- Whitman, Walt. *Complete Poetry and Collected Prose*. Ed. Justin Kaplan. New York: Lib. of America, 1982. Print.
- Wilson, Matthew. “Reading *The Human Stain* through Charles W. Chesnutt: The Genre of the Passing Novel.” *Philip Roth Studies*. 2.2 (2006): 138-50. Print.
- Woodward, C. Vann. *The Strange Career of Jim Crow*. 1955. New York: Oxford UP, 1974. Print.